さいわい通信

第9号
2025年2月1日
(株)さいわい企画
編集　クリスチャン・セレモニー・クラブ
(C・C・C)事務局
052-893-732

神様から頂いたいのち 希望と愛と喜び

―ご遺族挨拶より―

松尾智子様
同盟福音天白キリスト教会

母城田愛子は二〇二四年三月十六日に息を引き取りました。いつ召されたのかわからないくらい穏やかな最期でした。

昨年末に怪我で入院し、なかなか面会が許されませんでしたが、退院後は天白キリスト教会の野田牧師はじめ友人や信仰の兄姉に面会に来ていただき、多くの励ましを受けました。本当にありがとうございました。

母の生涯も父と同様に奇跡的であったと思います。すべて神様のお恵みによる事と思います。母は七人きょうだいの末っ子でした。すぐ上の二人は生後間もなく亡くなっています。母は七ヶ月の早産で生まれ仮死状態でした。一キロに満たない赤ん坊は産声を上げず、皆は木のみかん箱におがくずを詰めてそこに横たえ、火葬場に行こうと準備していたそうです。

その時小さな口から泣き声が漏れ、大人たちは急いで湯たんぽを用意して、真夏に毛布にくるんで暖め、それで生き延びたのです。後日伯母から「愛ちゃんの頬が梅干しみたいに赤くふくらんだ時にはほっとした。」と聞きました。母のふくらはぎには湯たんぽでできた火傷の跡が残っていました。

後日、母は聖書の中に「月足らずで生まれたような」という表現を見て「まるで私のことみたい」と喜んでいました。自分の出生時の状況と同じように感じたのでしょう。

お孫さんの描かれた肖像画を遺影に

母は体が弱く病気がちでした。私を産んだ時にも死にそうになりましたが、また命をいただきました。

◇◇◇

そんな母は私がイエスキリスト様を信じた九年位あと、父と同じ頃にイエス様をまことの神、救い主として信じました。母が49歳の時でした。

それまで世の中の常識や自分の考えに従って、正しいと思う道を生きてきました―どちらかと言うとまあまあ良い人でした―しかし、信仰を持ってからの母はたびたび「やっぱり聖書の言うとおりだなあ」と言うようになりました。

戦争中に育った母は世の中の常識が戦争前後で激変したという経験をし、人間は変わりやすいものだと知っていました。だから**「聖書だけはいつまでも変わらない真理だ。間違いない。」**と感じ、安心できたのでしょう。

◇◇◇

つらい事も喜びに変わりました。足が悪かった母はよくひどい事を言われました。以前はその度に怒っていたけれど、信仰を持ってからほとんど怒ることがなくなり、いつも笑顔を見せていました。コロナの苦労の中でも会う時はいつも笑顔でした。

神様に愛され、神様を愛するという幸せの秘訣を見つけたのだと思います。母は「愛子」と言う名もとても喜んでいました。「神様は愛」だから私も神様に愛されてうれしいと言っていました。

◇◇◇

母は強い忍耐力もいただきました。若い時は我慢できずに兄と喧嘩したり、店の手伝いをさぼって遊びに行き母親にひどく叱られたと笑いながら話してくれたことがあります。

しかし真の生ける神様を信じ、心が喜びで満たされてからは本当に忍耐強い人になりました。思い出すと今でも驚くことが多いです。体はいつもどこか調子が悪くよく入院しましたが、文句を言わず、抵抗もせず、忍耐していました。高齢で体が不自由になってすぐに動けない時でも、私が「待っててね」と頼むといつまでも待っていてくれました。今回退院の前にも「迎えに来るからね」と言うとベッドの上で「待ってるよ」と大きな声で返事してくれました。

その忍耐力の源は神様への絶対的な信頼だと思います。信頼が希望を与え、神様や周りの人への愛を生んだのです。そんな母を尊敬しています。母に希望と愛と喜びを与えてくださった神様に感謝します。

◇◇◇

一キロに満たない仮死状態の赤ん坊に命を与え、不思議なことに92歳まで喜びに満ちた人生を与えられた。今後も天国で大好きな神様と、父ちゃんと、多くの兄姉たちと喜んで永遠のいのちを生きることができるように、罪の身代わりとして死んでくださったイエスキリスト様に心から感謝申し上げます。

母はきっと、この弱い朽ちていく肉体は別にして、みんなに自分と同じように神様を信じて喜んで生きてほしいと願っているはずです。

一人っ子である私を気遣い、母を見送るために寄り添ってくださったいとこたち、同盟福音天白キリスト教会の皆様、他教会の兄姉、長年にわたって母を愛してくださったお一人お一人に本当に感謝します。みなさまの上に神様のお恵みがますますありますように。

み言葉を味わう⑧

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

ローマ8：38―39

テレビドラマで小学校の卒業式のシーンが出てきて思わず泣いてしまいました。そのシーンを見ながら、今年卒業の息子に「卒業するの寂しい？」と聞くと「寂しい。」と返ってきました。ほとんどの友達は同じ中学校に行くとしても、別れの時というのは寂しいものだと思わされました。

人生には多くの別れがありますが、死はあらゆるものとの別れです。愛する人との別れ、肉体との別れ、この世界との別れです。すべてと切り離されてしまうその中で、キリストは信じる者を捕らえて離しません。神の愛は死よりも強くあなたを掴み続けてくださいます。

一麦ゴスペルチャーチ
牧師　山下義道

葬儀セミナー 開催教会からのお手紙

日本基督教団
赤池教会
2024. 8. 25

「葬儀セミナーを開催して」

赤池教会　仲田 水尾子

さいわい企画さんに赤池教会の葬儀をお願いするようになって 13 年になります。土地区画整理による会堂建築もありましたので、旧会堂、仮プレハブ会堂そして新会堂になってからと、其々に対応して下さり恵まれた葬儀を行うことができました。
ご遺族の教会員、信徒でないご遺族皆さんが本当によくしていただいたと感謝しておられます。葬儀担当者もこの 2 年半は無牧で直接連絡など関わらせて頂き、さいわい企画さんのご遺族に寄り添って下さる様子を間近に拝見し、より安心を得ています。
教会の『葬儀の手引き』を作成して教会員に配布したのを機に、再度『葬儀の学び』をしたいとお願いし 8 月 25 日に開催するに至りました。杉浦さん藤田さんと礼拝を共にし、その後集会室に場所を移してテーブルを囲んでの和やかな会でした。

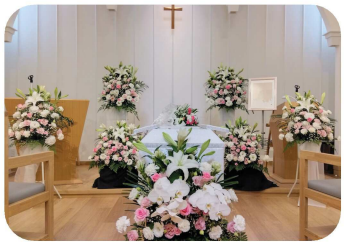
キリスト教と仏教等他宗教との葬儀の違いを先ず学び、キリスト教葬儀は、信仰者の魂は召されたら神様のもとにあること、すべてを神様にゆだねて祈り賛美する『礼拝』であること、信仰を証しする時、そしてご遺族の悲しみに寄り添い慰めを祈る時と再確認致しました。

教会員の高齢化もあり、それぞれ自分事として考え質問したり、家族の葬儀をされた会員の経験をお聞きしたり、この地域の火葬場の現状も教えていただいたりと豊かな会でした。当然のことですが、葬儀は自分でするものではないので、どんな葬儀をしたいか家族にエンディングノート等に記して伝えておくことも大切なことです。
学びを通して、希望をもって備えることが出来る幸いを心から感謝しつつ、「まだまだ元気でいましょう」と明るく会を閉じました。
杉浦さん藤田さん、会のために資料をたくさん準備下さり有難うございます。そしてこれからもよろしくお願い致します。

メモリアルボードを囲んで

セミナーを開催させていただきしばらくのち、赤池教会の方からお葬儀のご依頼をお受けしました。その日お昼過ぎから夜にかけて病院にて看取りをされたご家族様と、教会にてお打ち合わせすることとなりました。私は教会にてお待ちすることになりましたので、一足早く教会へ向かいました。すると赤池教会の教会員の方がお二人、受け入れのご準備を済ませてくださっており、ご遺族様のためにおにぎりを用意してくださっていました。その温かな気配りに感動致しました。

また、お葬儀の当日には、ご遺族様に思い出の写真を飾っていただいたのですが、幼稚園・小学生のひ孫様のハートの折り紙や小さな花の飾りを一緒に貼って、とても素敵なメモリアルボードが出来上がっていました。



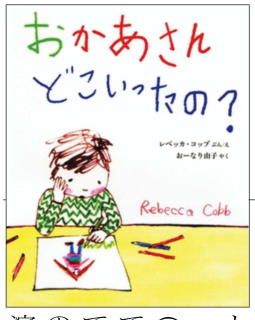
作成されたご遺族様はもちろんのこと、会葬された方々にとっても、故人様とのたくさんの思い出を振り返る、ぱっと花の咲いたような楽しい時間が、このメモリアルボードのまわりにはありました。（藤田）

みんなの絵本

『おかあさんどこいったの？』
レベッカ・コッブ　文／絵
おーなり由子　訳
発行所　ポプラ社

お母さんのお葬式の場面から始まる本作。小さな男の子はいなくなったお母さんを探します。お母さんがずっと帰ってこないことに悲しんだり、自分を責めたりもします。そんな男の子にお父さんは、お母さんは天国に行ったことを伝えます。日常生活や思い出の写真を家族で見る時間を経て、男の子には笑顔が戻ります…

しかしお母さんを失ったつらさは突然襲ってくるのです。余白をたっぷりとったそのページは見る者の心をぎゅっと締め付けるでしょう。けれども、男の子にはお母さんとの思い出があります。笑ってたこと、だっこしてくれたこと、いつまでも変わらない素敵なお母さんの思い出が。そしてお母さんは天国にいるという確信があるのです。



訳者あとがきに、共感の言葉が書かれています。大切な人を亡くしたとき、時間（変わらない日常）は悲しみをとかし、色あせない宝物を残してくれます、と。

人との別れに幼い子も大人も関係ありません。うまく言葉にできるかできないか、涙が止まらないのか天国への確信に基づき喜びに満ち溢れているのか。けれどすべては大切な人と過ごしてきた時間と、これからも変わらない毎日が慰めてくれるのでしょう。そしてそのすべてを見守り励まし祝福してくださる神様がいます。

ちなみに、この絵本の見返し（表紙の内側）の模様は作中に出てくる、お母さんが「いつもきていたぐるぐるもようのセーター」の柄なんです。とても愛らしい演出です。（藤田）

編集後記

◆たらの芽の天ぷらを食べました。教会の庭先のたらの芽を思い出しました。春ですね。（杉）
◆息子の小学校卒業を目前に控え、時の流れを感じています。子どもと過ごす時間も短くなり、自分の時間は増える一方で、寂しさもあります。今を大切に生きていきたいと思わされています。（山）
◆赤池教会でのお葬儀では、ご遺族様の小さなお子様の保育士をする時間がありました。前夜式翌日の告別式の朝、私の似顔絵を描いたハートの折り紙をプレゼントしてくれて、とても嬉しかったです。（藤）

さいわい企画ホームページはこちら

過去のさいわい通信もご覧いただけます